



国民の森林・国有林

中部森林管理局

〒380-8575長野市大字栗田715-5

☎050-3160-6513

<http://rinya.maff.go.jp/chubu/>

広報

中部の森林



賀正



南アルプス仙丈ヶ岳から望む日の出

主な項目	○ 奥田局長年頭所感	P 2
	○ 各地からのたより	P 4
	○ 寄稿 上松町での買物	P 6
	○ シリーズ「森林官からの便り」	P 7
	○ 2014年 主な出来事	P 8
	○ シリーズ「ご当地自慢」	P 10



年頭所感

林業再生を現実のものに

中部森林管理局長 奥田 辰幸

新年明けましておめでとうございます。

読者の皆様におかれましては、つがなく新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年は、七月の南木曾町の土石流災害に始まり、八月の飛騨地方の豪雨災害、九月の御嶽山の噴火災害、そして十一月の長野県神城断層の地震災害と災害対応に追われた一年でした。

特に、御嶽山の噴火では戦後最悪の火山噴火災害ということで多くの犠牲者を出し、自然災害の恐ろしさを目の当たりにしました。

中部森林管理局といたしまして

は、引き続き関係機関と十分連携する中で、被災者の立場に立った適切な対策を実施し、地域住民の皆様方に安全・安心をお届けすることが出来るように取り組んで参ります。

国有林野事業は、本年四月に一般会計に移行して三年目を迎えます。

これまで二年間、「公益重視の管理経営の一層の推進」、「森林・林業再生への貢献」、「山村地域の振興と森林の総合利用」を目標に様々な取組を行って参りましたが、少しずつその成果が出つつあります。

そうした実績を背景として、国産材の安定供給と効率的な施業を武器に、国有林が先頭に立って、林業

の再生にチャレンジしていきたいと考えています。

局管内の人工林の齢級別蓄積を見た場合、十齢級以上が既に七割を占め資源は充実しています。高性能林業機械は五―一台導入され、林道や作業道の整備も着実に進んでいます。今年一年間に管内で新たに整備される大型の製材工場、木質バイオマス発電施設の木材使用量は、一年間で三〇万立方メートルにも及ぶとともに、公共施設の木造化・木質化も着実に進んでいます。林業再生のチャンスは、まさに目の前に転がっています。

関係者が一体となって、国産材を

低コストで生産し、質・量・価格の安定供給を行うことにより、林業の再生が現実のものとなり、山村地域での雇用の創出や地域の活性化に貢献することが出来ると思います。

中部森林管理局では、今年も国有林の使命達成のために、こうした諸課題に職員が一人となって取り組んで参りますので、皆様方のご支援・ご協力をお願い申し上げます。

結びに、皆様方の今年一年間のご多幸とご健勝を祈念しまして、年頭の挨拶とさせていただきます。

えと
きとひつじ
今年の干支は乙未



羊は「祥」に通じ、中国の吉祥動物の一つです。群れをなす（一頭が動くといて行く）ことから「家族の安泰」を表すとされ、いつまでも「平和」をもたらす縁起物とされています。

「未」の干支の特徴としては、「穏やかで温かく、優しい。正義感が強く、真面目」だと言われています。

また、財テクの才能があると言われる、財を成すのに向いている人も多いようです。

未年生まれの有名人をあげると一九五五年・ステイブ・ジョブス、ビル・ゲイツ、一九六七年・俳優の織田裕二、一九七九年・女優の仲間由紀恵、一九九一年・プロゴルファーの石川遼といった方々がいます。

過去に起きた未年の出来事を紹介すると、一九四三年・東京府と東京市が統



羊の群れ（岐阜県中津川市にて）

合され東京都が誕生、一九九一年・ソビエト連邦崩壊、ゴルバチョフ大統領が辞任、二〇〇三年個人情報保護法が参議院本会議で可決され成立などがありました。

今年一年、穏やかに過ごしたいものです。

中部地方 「輸出向け木材産地連携検討会議」

「名古屋事務所」十一月十三日、（社）日本木材輸出振興協会が、静岡県男女共同参画センターにおいて、中部地方「輸出向け木材産地連携検討会議」を開催しました。

この会議は、「農山漁村六次産業化対策事業・輸出に取り組む事業者向け対策事業（農水省補助事業）」として行われたもので、中国、韓国をはじめ、海外における日本産木材のジャパン・ブランドの確立を大きく進展させ、農林水産物・食品の輸出額を平成三十二年までに一兆円水準とする政府目標の達成に寄与することを目的としています。全国を四ブロックに分けて取り組まれており、各地区の検討会議終了後、三月には全国統一の会議が予定されています。

会議には、学識経験者、国、県、木材産業に関わる関係者ら三十数名が参集し、事務局から、本検討会議の目的と検討内容などの趣旨説明の後、鹿児島大学



会議の様子

遠藤教授より、「国産材輸出の現状と課題」「供給サイドの視点から」と題して、講演がありました。講演では、南九州からの原木の海外輸出量が国内で断トツであることやその中でも特に鹿児島県志布志港からの輸出量の飛躍的な増加が見られるなど、その現状や理由に触れられ、輸出向け木材の可能性についてお話しがありました。

講演の後、意見交換が行われ、「輸出向け木材」については、流通システム等が確立されていない中、見えない部分が多く、一つ一つ整理し、オールジャパンで取り組んでいく必要があることが確認されました。

東三河木材供給システム構築事業 現地検討会

「名古屋事務所・愛知所」十一月二十日、愛知県新城市内において、愛知県

新城設楽農林水産事務所主催の「平成二十六年 度 東三河木材供給システム構築事業・現地検討会」が開催され、中部局から名古屋事務所、愛知所が参加しました。

この構築事業は、「豊富な森林資源を有する東三河地域において、急峻な地形における皆伐施業の生産性の実証を進め、林業の活性化を図る」ことを目的に進められています。

このため、林地傾斜三〇度、林齢六九（七五年生のスギ・ヒノキ人工林（〇・六畝））において、事業実行中の（株）東海林材市場と新城森林組合の協力を得て行われました。

当日は、獣害対策の概要、生産現場の作業システム及び実証結果（途中経過）等の説明のあと、急峻な谷地形で、先柱と元柱の支点間距離一七三㍎、支点間高低差六八㍎の架線による集材の実演が行われました。実演は、高性能搬器のコンラッド社製・ウッドライナー2500による全幹集材・山土場集積、プロセスサによる造材、極積みで行われました



ウッドライナーによる
架線集材作業

(これらの高性能林業機械は公益財団法人 愛知県林業振興基金が貸付)。

生憎の雨となりましたが、参加者からは、システムにウッドライナーの価格、獣害防止柵に関する質問が出され、また、高性能林業機械を初めて見る参加者が、プロセッサが器用に行う、集材↓枝払い↓採寸↓玉切り↓植込みの様子を感嘆しながら興味深く見学するなど、充実した検討会となりました。

現在、こうした取り組みが各地域で進められており、多くの作業システムの提案がされています。

効率的な作業システムを地域の特性や事業体等にマッチングさせた木材の供給システムの確立を急がなければならないと感じたところです。

「森林作業道作設オペレーター」

育成強化事業 現地検討会

「名古屋事務所」十一月二十七日、伊那市信州大学手良沢ステーションにおいて、(一社)フォレスト・サーベイ主催の平成二十六年度「森林作業道作設オペレーターの育成事業・現地検討会」が開催され、森林作業道作設従事者、国及び県の担当者が参加しました。

国有林からは局・署等の職員十四名が参加し、総勢三六名で検討会が行われました。

今回の検討会は、施業地が従来の林分よりさらに奥地化し、施業地に至るまで



森林作業道現地検討会の様子

に急傾斜地やぜい弱地の箇所等を通過する頻度が増加する中、これらに対応した適切な路線選定や土工、構造物の設置等新たな課題に対応して行くために行われました。

午前中は、ポイント毎に講師から作設の考え方と現状等の説明があり、参加者らと意見交換・現地検討が行われ、午後からは、信州大学斎藤助教から「森林作業道の作設技術」と題して講義を受け、意見交換が行われました。講義の中では長野県で作成した「CS立体図(旧微地形図)」の紹介もありました。これは「標高」「傾斜」「曲率」の三つの情報を異なる色調で彩色し、透過処理することで、等高線では表現が困難な情報を視覚情報として直感的に判読できるもので、この新しい図法を活用した急傾斜地

等での森林作業道作設の手法も紹介されました。林野庁は、平成二十二年十一月に森林作業道作設指針を制定し、補助事業により、平成二十五年度末までに全国で四四九名の指導者と二、七四〇名の森林作業道作設オペレーターを育成してきました。



意見交換会の様子

また、森林作業道作設オペレーター養成用テキストが作成されていますが、今年度は急傾斜地での土工、まさ土・火山灰質粘性土(関東ローム層、黒ボク土)・シラスといった特殊土を中心としたぜい弱地に係る工法等についての補助教材も作成されることとなっています。

今後、公益的機能の高度発揮と持続可能な林業経営を進めていくための技術者等の育成に役立つものと期待されています。

各地からのたより

職業訓練のための実習用教材に 地域材を供給

「木曽署」十二月四日、長野県上松技術専門校に実習用教材として、木曽谷の国有林で育ったミズメ、ナラ等、約四立方メートルの製材品を納品しました。

この取組は、本年三月に上松技術専門校、木曽官材市売協同組合及び木曽森林管理署の三者で締結した「職業訓練のための木曽産木材の供給と利用等に関する協定」に基づくもので、地域材を利用することや学習フィールドを提供することにより地域が育んできた産業と歴史を学び、地域の木材産業や伝統工芸を引き継ぐ多くの人材を育成していくことを目的としています。



製材された広葉樹



製材品を搬入する訓練生

製材品は、王滝国有林から生産された約六立米の広葉樹を木曽官材市売協同組合傘下の地元の製材所で製材した後、同校へ搬入したもので、同校の木工科と木材造形科の訓練生約四〇名の手により樹材種や大きさに別に分けられ資材置場に保管されました。製材品は二、三年自然乾燥した後、家具製作等の資材として利用されます。

当日、訓練生からは、これまでの製材品と比べて木目や色艶の美しさの違いに驚く声が聞かれ、改めて木曽産広葉樹の魅力が再認識されました。

今後は、これらの取組を継続的に進めていくことにより、上松技術専門学校から巣立つ訓練生によって、技術と技能の継承が図られ、やがては木曽地域の木材産業の発展にも繋がるものと期待しています。

「運命の木」のご縁です

〔東濃署〕 先ごろ、兵庫県神崎郡市川町役場の広畑地域振興課長ら一行四名が来署され、加子母裏木曽国有林（岐阜県中津川市）をご案内しました。

同町と国有林との関わりには、国宝であり世界遺産である姫路城天守閣の西の心柱にまつわる次のようなエピソードがあります。

「西の心柱」は、昭和の大修理（昭和三十一年～三十九年）の際に腐っていることが判り、モミとツガの継ぎ柱からヒノキの通し柱に取り替えられることになりましたが、提供の申し出があった市川町の笠形神社のご神木は僅かに反りがあつて断念するなど、天守閣を支えることのできる用材探しは難航を極めました。調達を請け負った業者が一年以上も全国を探し歩いた末に、ようやく加子母裏木曽国有林で条件にあう樹高三五メートル、胸高直径一・二メートル、根回り五・八メートルという木曽ヒノキを見つけました。

しかし、ホツとしたのも束の間、巨木から採材された長さ二・八メートル、重さ一〇トンもの柱は、当初の目論見であったヘリコプターでは大きすぎて搬出できず、これをどうやって運び出すかという難題に突き当たります。天守閣は既に組立が始まり新しい心柱の到着が待たれるばかりで、搬出路を新たに開設する猶予もあり

ません。深い谷を渡して対岸の森林鉄道に載せるという残された手段は調達業者の手に負えず、付知営林署（現東濃森林管理署）が立木の探索に続いてこの作業にも全面協力することになりました。

署での技術的検討の結果、向こう岸までスカイラインと呼ぶケーブルを三本張って巨大な材を吊し、集材機三台で引っ張る方法がとられました（通常は一本、一台）。差し渡し六〇メートルのケーブルを互いにバランス良く架け、三台の集材機の出力を調節して荷が暴れないように曳くというこれまで誰も経験したことのない難しい挑戦でしたが、架線集材のベテラン達が腕をふるって成功に導き、木曽ヒノキの柱は無事に引き渡されました。

その後、この柱は、森林鉄道のカーブの大小に合わせて複数の台車を前後に移動させるなど町までの一五キロほどを何日もかけて慎重に運ばれましたが、あと少



架線搬出中（広報「みどり」から）

しのところでバランスが崩れて台車から落下し折れてしまいました。雪の中での探索からこれまで幾度も困難をくりくり抜けてきましたが、さすがに万事休す。

この窮地を救ったのが市川町笠形神社のご神木でした。氏子の皆さんが話し合いを重ねて決断したのだからと、一度はあきらめた提供を改めて承諾下さり、二本を継いで用いることになったのです。

姫路では何万人もの市民が木曽ヒノキとご神木を出迎えて祝い曳きが行われたのち、二本のヒノキを巧みに継ぎ合わせて心柱が立てられ、天守閣の大修理は見事に完工されました。

この逸話は、兵庫県の中学校道徳副読本に「運命の木」として紹介され、これにちなんだバウムクーヘンが人気を呼ぶなど、地域おこしにも一役買っているとのことでした。

当日は、この木曽ヒノキが運ばれた森林鉄道の軌道跡に一行をご案内して、搬出された谷筋を遠望し、当時の写真資料を用いて状況をご説明しました。広畑課長は、「これまで文献で見ただけでしたが実際の様子がよく分かりました。地元の関係者にも早速伝えたい。」とよろこんでいただきました。

市川町では、姫路城の平成の修理が来春終了することを機に、西の心柱を縁として、中津川市、姫路市と交流を深めていきたいとのことでした。

（本稿で用いた諸数値は、付知営林署